

事例 45

タイトル：思いを知り、実現するために

・ < 事例の状況 >

3年程前にアルツハイマー型認知症の診断を受け、その1年半後に入居する。ADLはほぼ自立しているが、日中は特に自ら何かをしようということはなく、声掛けをして職員と一緒におしぼりをたたんだり、ぼんやりとテレビを眺めるような過ごし方をしている。夕方になると表情が険しくなり、「家に帰る。」と出口を探し、歩き始める。居室は個室で、施設提供のベッドとタンスのみの設えとなっている。なぜを探求し、それに対応したケアの提供をと考えているものの、なかなか思うようにいかないでいる。

・ < この事例で課題と感じている点 >

帰りたいという背景を、なかなかつかむことができないでいるため、その場しのぎの対応となってしまう。情報源となる娘も多忙で、情報を得ることが難しい。情報を把握できないでいる場合のケアのあり方をどう展開していくべきか。

・ < キーワード >

帰りたいという背景。その場しのぎ。情報。

・ < 事例概要 >

【年齢】 80歳代前半

【性別】 女性

【職歴】 自営業

【家族構成】 一人暮らし。老健入居。夫は他界。夫との間に2児をもうける。

【認知機能】 HDS-R 10点

【要介護状態区分】 要介護2

【認知症高齢者の日常生活自立度】 a

【既往歴】 自律神経失調症、甲状腺機能亢進症

【現病】 アルツハイマー型認知症、高血圧症、高脂血症

【服用薬】 メバン、ボナロン、アダラートL、アリセプトD、セロクエル、マイスリー

【コミュニケーション能力】 娘以外の顔と名前を覚えることはないが、ある程度の認識を持って誰とでもにこやかに話をする。ある程度の日常会話は成り立つ。

【性格・気質】 普段は穏やかで、笑顔が見られる。

【ADL】 自立 入浴等を除く。一部見守り

【障害老人自立度】 A1

【生きがい・趣味】 書道、編み物

【生活歴】 4人兄弟の2番目として出生、その他情報なし。

【人間関係】 時々娘の面会あり。以前同じユニット内に幼なじみがいたが、その入居者が退

居後、特に話をする相手等いない。

【本人の意向】 家に帰りたい、できないところは手伝ってほしい。

【事例の発生場所】 介護老人保健施設